

エピソード

二〇〇六年六月九日、三友商事東京本社

ザルカウィは六月七日に米軍の空爆で殺害された。

バグダッド北方六〇キロメートルにあるバクバという街で会議をしていたところを狙ってF-16戦闘機二機が約二三〇キロの爆弾を二つ投下した。ザルカウィは頑丈な建物の中にいたがひとたまりもなかった。この空爆で側近の一人を含む七人が殺害された。その中には女性も二人含まれていたが内一人はザルカウィの三人の妻の一人だった。

ザルカウィの死はアルカイダにも確認された。

アルカイダはザルカウィをシェイクと呼び殉教者として称えた。そして、彼の死はアルカイダのジハド(聖戦)に対する決意を強めることになったと主張した。他方、ザルカウィの出身地では、人々がやはり彼を殉教者として称え彼の死はイスラムにとっての大損失であって残ったものは米軍との戦闘を継続すべきだと訴えた。

その一方、シーア派イラク人の女子供はザルカウイの死を祝って通りで踊りながらイラクの兵士達に菓子を配った。シーア派の兵士達も検問所で踊りながらその死を祝いシーア派のモスクでは信徒達が神に祈りを捧げた。

慎太郎はウェブサイトにアップされた九日付けのサウジ英字紙でこのニュースを読んでいたが、その脇に信じられないニュースを見つけた。

ザルカウイの写真ほど大きくはなかったが、スルタンに瓜二つの顔が載っていたのだ。しかも、そのニュースはフセイン前大統領の出身地であるファルージャでも空爆が行われサウジ内のアルカイダ下部組織・沙漠のサソリの幹部が殺害されたというものだった。

慎太郎は慌ててその記事を詳しく読んだ。

テロリストの名前はスルタン、米国のテキサス大学でバイオを研究したエリートでアルバハ出身とあった。その名にはシェイクという称号が冠されていた。“このテロリストは沙

漠のサソリ内のバイオ兵器の専門家で彼の死によりテロリストがバイオ兵器を使用する危険性は低くなった”とコメントされていた。

バイオを研究したエリートでアルバハのシェイクと云えばスルタンに違いない。

スルタン、スルタンが死んだ。しかもテロリストとして・・・

慎太郎はその記事の内容を信じたくはなかった。直ぐにスルタンの掛けてきた電話番号に電話を入れてみたが全く繋がらなかった。やはり無駄だった。

慎太郎は新聞記事を見ながらしばらく呆然としていた。

スルタンが死ぬ筈がない。いつも周囲の人々から尊敬されていたスルタンが死んではいけない。

そして、スルタンが沙漠のサソリの筈はない、絶対にそんなことはない、断じて彼は穏健で敬虔なモスLEMだと頭の中でいつまでも反芻していた。

その後、原油価格は植木の懸念をよそにイランの核開発問題、ナイジェリアの民族抗争などのジオポリティックス要因、米国のハリケーン被害などを背景にして続伸した。そして、イスラエルがレバノンのヒズボラ（シリア派民兵組織）を空爆すると原油価格は一気に上昇し七月一四日には史上最高値を更新して七七・〇三ドルに達した。

植木に聞けば、きつと、

「異常な高価格です。手がつけられません。不当、不公正、

「本当に困ったものです」

と、即座に答えたに違いない。

真夏のリヤドではとても熱い陽射しをまともに受けて立っていることなど出来ない。しかし、一人のインド人が刑務所の扉を出て、その熱い陽射しを楽しんでいた。

「ふう、助かった。もう少して死刑になるところだった。こ

このところの石油高価格が俺の命を救ってくれた。殿下もまだまだ役に立つ男と見直してくれたのだらう」

そう言うと静かに走り寄って来た高級外車のドアを開け中に入った。

「イブラヒム様、お待たせしました。それでは殿下のところにお連れ致します」

運転手は助手席に座ったイブラヒムに言った。

一方、東京駅のホームにはアラブ人らしい一人の男が大きなスーツケースを持って降り立った。

それを見つけてやはりアラブ人らしい男が近寄った。

「シェイク・スルタン、遙々東京へ、ようこそ。お荷物はお持ちしましょう」

「ふむ、ありがとう」

スルタンは笑顔で応えた。

(了)